

永井祐ロングインタビュー 田中拓也

『早稲田短歌42号』に「永井祐ロングインタビュー」が十七ページにわたって掲載されている。永井祐の最新歌集『日本の中のしく暮らす』（ブックパーク）が話題を集めている中で、ポリウムのあるインタビュ記事だけあり、インパクトがあった。永井にインタビューをしているのは綾門優季と山階基の二名。二人が永井に質問を重ねる形式でインタビューが進んでいる。その中で印象に残った場面を紹介したい。

綾門：永井さんの短歌は、世代的なくくりとして若者の代表格のように受容されがちだと思うんですが、永井さんとしては、そういう受容のされかたに違和感を覚えたりしますか。

永井：世代っていつてもいろんな人がいるから、あんまり言わない方がいいんじゃないかと、個人的には思います。受容のされかたの話ですけど、一応、こういう受容をしてほしい、みたいな発言とかステートメントとかは出さないっていう方針なんです。個人的にその読みはうれしいっていうことはもちろんありますけどね。

永井の発言から読み取れるのはオーソドックスな短歌観とってよい。「世代っていつてもいろんな人がいるから」という、世でよくやることの難しさ。作品の「読み」に対する感覚。いずれ

も、ごく自然な感覚である。インタビューをする側の綾門に対する永井の答え方もさりりとしており、輪に広がりや深まりも見られない。また、次のやりとりも見てみたい。

山階：先ほど、作中の主体、即、永井さんというわけではない、とおっしゃっていましたが、短歌における作者と作中主体との距離の取り方については、どんな風にお考えですか。

永井：作者ごとに全然違うって思いますね、基本的には。で、私はやっぱりそのまま自分って風には思えないかなあ。そこには、壁というか、膜というかジャンプがありますよね、明らかに。実際見聞きしたことがネタになることはよくあるんですけどね。でも他人が見聞きしたこともたくさんネタにしてるんで、やっぱり、即ではないです。私の短歌のイメージと本人のイメージとはそんなにずれないみたいなので、そういう風に考える人も結構いますけど、でもそれをそれ違いますから、つていちいち正していくっていうのもまた違うかなっていう気がする。

ここでの作中の主体と作者の問題に関する永井の発言も決して奇抜なものではない。インタビュー記事を通読して感じたのは永井のオーソドックスな短歌観とってよい。『日本の中でたのしく暮らす』における独特な作品世界。それに対するインタビュ記事に見られる永井のオーソドックスな短歌観。個人的には、インタビュアーにもっと踏み込んで質問をしてほしかった気がしてならない。しかし、総合誌や結社誌では成立しにくい企画を立てることができるのが、学生短歌会の魅力だと思う。次回の企画も楽しみにしたい。